

# 小説家，及び博物館員としての Peter Seeberg を探る

デンマーク語専攻 里見董

## 目次

1. はじめに
2. デンマーク文学における 1960 年代のモダニズム
  - 2.1. 概要
  - 2.2. Peter Seeberg のモダニズム文学
  - 2.3. 作家 Peter Seeberg の立ち位置
2. Peter Seeberg とは何者か？
  - 3.1. 略歴
  - 3.2. 博物館員としての Peter Seeberg
  - 3.3. 作家としての Peter Seeberg
4. 短編小説「患者」("Patienten") の事例研究
  - 4.1. 概要
    - 4.1.1. 作品の成立背景
    - 4.1.2. あらすじ
  - 4.2 内容分析
    - 4.2.1. 人間を実存として捉えること
    - 4.2.2. 人間をものとして捉えること
    - 4.2.3. 考察のまとめ
5. まとめ

使用テキスト

参考文献

## 要約

本論文は、デンマークを代表する小説家の一人であり、博物館員であった Peter Seeberg (1925-1999) の人物像について考察を行ったものである。1960年代のモダニズム文学作家として知られる Seeberg は、作家としてデビューする前から博物館員として活動していたという経歴を持つ。博物館員としての広範囲にわたる活動が、Seeberg の作家活動へのインスピレーションであったとともに、彼の文学界における立ち位置や、作品のスタイルにも影響を与えているとされる。そこで本論文の意義は、Seeberg の経歴や作家活動の展開について、詳しく考察することで、モダニズム時代を生きた特異な作家の全貌を明らかにすることとした。その際、1960年代のモダニズム文学や実存主義的な考え方と関連づけられるとともに、博物館員として「もの」の存在に着目するという視点が見られる短編小説「患者」“Patienten” を取り上げ、事例研究を行った。またこの作品が収録された短編小説集『探索』*Eftersøgningen* は、Seeberg にとって初の短編小説集であり、彼が1960年に Viborg で博物館長に就任したのちの1962年に初めて発表された作品であった。このことから、この作品が書かれた時期は、Seeberg が博物館員と作家の両立について考える上で、重要であったのではないかと考えた。以上のような、本論文における研究目的とその方法を、第一章で示した。

第二章では、デンマークにおける1960年代モダニズム文学の展開と、そうした流れの中での Seeberg の作家活動について述べた。Seeberg は1955年、日刊紙 *Information* が行ったコンテストに、戦後の新しい時代について述べた論文を寄せ、賞を受賞している。また翌年の1956年には、自身が経験した第二次世界大戦を題材として扱った長編小説『脇役たち』で作家としてデビューし、作品の革新的な形式が高く評価された。一方で、Seeberg は文芸界の中心から離れた立ち位置にいた。このことは、彼が博物館員として活動し、独自の制作場所を築いていたためであると指摘されている。

第三章では、博物館員としての Seeberg、作家としての Seeberg にそれぞれ着目しながら、彼の経歴についてまとめた。博物館員 Seeberg は、若い頃の国立博物館での仕事を通して、物事存在に関心を持ち、客観的で正確な記述に基づいた表現方法を獲得していた。また当時のインタビュー記事から、Viborg Stiftsmuseum で博物館長に就任した彼が、博物館員としての活動と、作家活動を両立しようとしていたことを示した。作家 Seeberg の

文学作品は、哲学的な前期の作品から、博物館員としての仕事との境界が曖昧で、「ものの存在」により着目した後期の作品へと展開していくと言われる。このことを、Seeberg が晩年に関わった展示のプロジェクトである「消えるかもしれないもの」“Thing der måske forsvinder” から、彼による詩の形式となったテキストを引用し、確認した。この展示では、新しい技術やライフスタイルが生まれたために、現在は暗く静かで、人目につかない場所にあるものに焦点が当てられている。

第四章では、短編小説「患者」の考察を、人間を実存として捉えるという観点と、人間をものとして捉えるという観点から行った。主人公の私(jeg)は、「ありきたりの壊死」“almindeligt bortfald” と呼ばれる、とても珍しい病気にかかり、入院生活を送っている。医者たちが主人公の病気を促進していたということもあり、私の体は足や腕のみでなく、心臓や頭まですべてが人工の「もの」に置き換えられる。こうした部分から、医者たちは臓器移植という技術を試すための「もの」として、患者である主人公を捉えており、人間が「もの」であるかのように扱われていると考えた。そうした状況の中で主人公は、自身の人生は自分のものなのか、自分は本当に自分自身であるのかを疑問に思う。物語の最後で主人公は、新しく取り替えられた自分の体を、自分のものと感じるようになる。このように、主人公が自身の実存を認められた大きな理由は、妻から自分の存在を認めてもらったことができたということであると考え、自身のアイデンティティとは、周囲の人との関わりから得られるものであるとまとめた。またそうした場面から、人間が「もの」を持つということも、アイデンティティの形成に影響しているのではないかと考えた。そして、人間が「もの」とは究極的に異なるのは、アイデンティティの模索を行うことだと結論づけた。以上のように、Seeberg は博物館員としての視点から、「もの」の存在を中心に扱った物語をも作り出していた一方で、実存主義的な捉え方で、人間の生を考えていたと言えるだろう。

第五章ではこれまでに述べたことを振り返り、まとめを行った。第二次世界大戦後、従来の価値や人間の存在が疑問視される中で、Seeberg は博物館員としての視点を活かしながら、作家として、変化する時代の中での人間と「もの」の存在やそれらの関係を扱い、人々の議論を呼んだ。このことが、現代においても、彼が重要な作家と評価されることにつながっているのではないだろうか。